

愛鷹火山南麓の先土器遺跡層準出土黒曜石石器の原石産地の推定

著者	高橋 豊
雑誌名	静岡地学
巻	70
ページ	37-38
発行年	1994-11-20
出版者	静岡県地学会
URL	http://doi.org/10.14945/00025299

愛鷹火山南麓の先土器遺跡層準出土 黒曜石石器の原石産地の推定

高 橋 豊*

1986年以来、静岡県東部に広がる「愛鷹ローム層」の先土器遺跡層準から出土する黒曜石石器、石片を対象に、エネルギー分散型マイクロアナライザーによる主要元素組成分析(EDS)を行ってきた。同時に中部地方・関東地方の黒曜石原石試料についても同じ方法で対象データを蓄積してきた。その結果、原石産地の分析データと出土遺物の分析データを比較することの有効性を確認でき、先土器時代各期の黒曜石原石産地の推移を明らかにできることを知った(高橋・西田、1986・1988)。しかし、これまで分析に供した試料は石器製作時の剥片が主体で、製品そのものの分析は少数であった。剥片の分析であっても、同時に近接して石器の完形品が大量に発見されていたので、先の推定には大きな支障はなかった。今回は上記地域の遺跡群から出土した黒曜石石器の完形品を主とした分析から、黒曜石原石産地の推移の再確認を行った。

黒曜石石器の出土する遺跡は伊豆半島基部の愛鷹火山南麓の沼津市尾上イラウネ遺跡II・清水柳北遺跡・土手上(B・C区)遺跡と長泉町陣馬上B遺跡で、遺跡付近には「愛鷹ローム層」がよく発達し、先土器時代の黒曜石石器は「休場層」より下位の層準から出土する。この地域では、堆積土層の標準層序が確立しており、次の年代値が得られている。休場層：木片の ^{14}C 年代 $14,700 \pm 700$ y. B.P.、第1スコリヤ層直下： ^{14}C 年代 $18,030 \pm 450$ y. B.P.、ニセローム：AT火山灰層= ^{14}C 年代 $24,720 \pm 290$ y. B.P.、(松本ほか1987)、第3スコリヤ帯直上： ^{14}C 年代 $27,200 \pm 2200$ y. B.P.、第3スコリヤ帯直下： ^{14}C 年代 $28,100 \pm 400$ y. B.P. (図1)。

分析した試料は標準柱状図の■マークの層準から得た石器と剥片である。なかでも、休場層とBBI層準出土の分析試料が多く200点以上に達する。しかし、出土したすべての試料を分析したわけではなく、以下の手順で代表的な試料を抽出した。1. 石器・剥片が密集したブロック内の黒曜石を抽出する。2. 抽出した黒曜石をライトテーブル上に並べ、色調・透明度・晶子と晶子の集合が描く模様、斑晶・球顆などの特徴から同じ原石個体と認められるものをまとめる。3. まとめた各群から1～3点の黒曜石試料を抽出した。したがって供試試料は出土遺物の定量的な代表ではない。

その結果、黒曜石原石産地の推定は今までの予想を肯定する傾向を示した。すなわち、伊豆半島東海岸の縄文前期～中期の遺跡出土黒曜石片の多くは、伊豆七島系神津島の恩馳島、砂糠崎のものが大半を占めることを報告してきた(高橋・西田、1986)。しかし、今回の分析からこの傾向は伊豆半島基部の愛鷹山南麓の遺跡群では、縄文前期～中期よりより早く愛鷹ローム層中の休場層上部層(YLU)堆積時(^{14}C 年代 $14,700 \pm 700$ y. B.P.の層準)から始まっていることが判った。

以下、各時期の黒曜石原石産地の推移を図2に示す。石器の素材としてより優れた黒曜石を求めたらしく、地元の黒曜石を優先して使ったとはおもわれぬ。各時期の黒曜石原石産地の推移を規制している条件には、寒冷化、温暖化の動きと海峡の環境、火山活動に伴う搬入ルートの変更が絡む。

*沼津工業高校

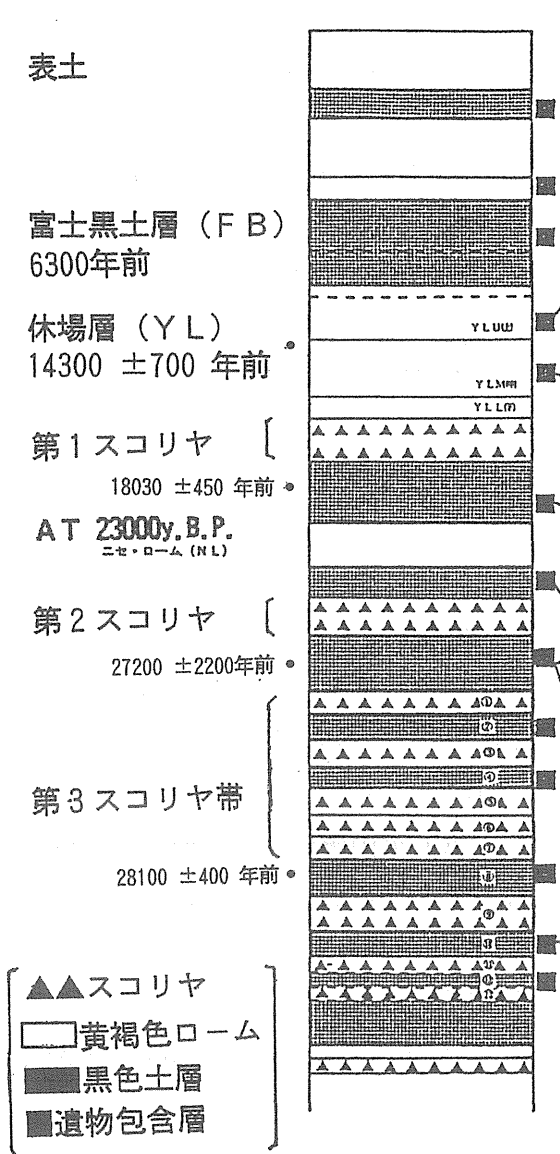


図1 愛鷹ローム層の標準柱状図

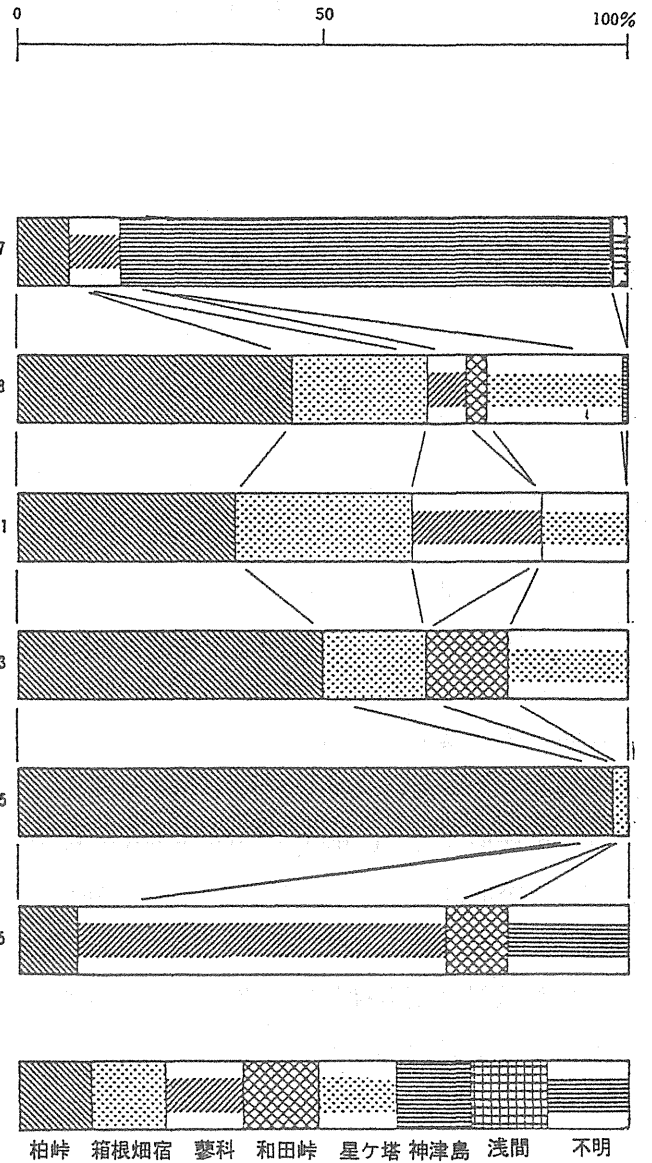


図2 先土器時代の層準にみる、愛鷹火山南麓の遺跡出土黒曜石石器の原石産地とその推移